八代トマト 「鮮緑」でグレードアップ

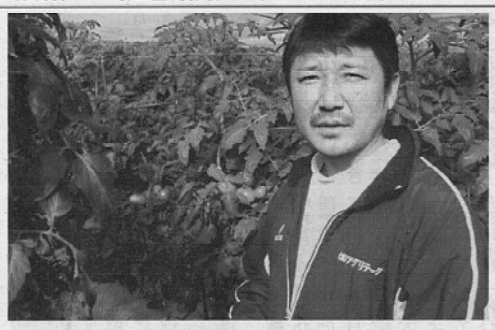
トマトだけで9・5ヘクタール

サカタのタネのりんか409全面採用

春トマト日本一の産地、熊本県八代市に㈱八代トマト流通センター（社長中村嵩氏）という社員50名の会社がある。昭和日進町とか郡築町が合併したとき、いままでのような農業経営とか販売型態を続けているかぎり夢は持てないだろうと一念発起して会社をつくり、イオン、生協、カゴメといったところと全体量の半分ぐらいを契約販売しており、その他は市場出荷している。

設立して今年で13年になり、年商約15億円ぐらいにのぼるという。会社の中心をなすのは㈲アグリテック（専務取締役中村雄一氏）という、中村社長の個人会社で、今年8年目だそうだが、育苗から栽培まですべてを手がけており、センターの一員としてすべての面倒を見ている。

このアグリテックは茨城県水戸市内原町のミネヒロン㈱が製造していて、地元八代市岡町谷川の㈱丸徳が販売している「鮮緑（せんりょく）」という速効性微量要素肥料を使用しているが、結果がよく、中村社長をはじめ実際に栽培を行っている中村専務たちの大のお気に入りのようだ。



八代トマト流通センターとアグリテックの専務として活躍している中村雄一氏

㈱八代トマト流通センター
㈲アグリテック
専務取締役 中村 雄一氏

アグリテックはトマトだけで9・5㌶作っている。そのほかにアスパラガス1㌶、米と野菜、野菜は主として白菜だが2・4㌶、なんだかんだでゆる〝畑売り〟だが、こ14㌶にのぼる。白菜は育れだと間違いないし、市場に出して、箱代にもならないということにでもなれば目にも当てられない。

「まして最近のように肥料代が上がったら儲けるより、わずらわしいだけですからね」と中村専務はいう。

トマトの品種はサカタのタネの「りんか409」。これまで長年作ってきた品種は葉かびが多くて作りにくくなっているので全部「りんか409」に変えたそうだ。問題の葉かびは出ていないし、すじぐされ、灰色かび病にも強いみたいで、味と食味がよく、市場の評価も高い。八代市で一時は大問題になった黄化葉巻病も今年は発生が極端に減っている。

8月の盆ころ、12、13日あたりから定植に入る。面積が多いので、8月、9月、10月にかけて、3段階ぐらいに分けて定植する。だいたい10月初旬から収穫になっている。

早い作型の後作はメロン（肥後グリーン）に植え替える。メロンは全部で4㌶ぐらいである。

8.5ヘクタールは借用ハウス

反当たり20万円で

中村専務の案内で栽培状況を見せてもらう。9・5㌶のハウスは自分の持ち分は1㌶ぐらい、あとの8・5㌶は借りもののハウスだという。骨組みと暖房機、潅水装置などは貸主の所有で、それを10㌃当たり年間20万円で借りている。高齢者になって就労できない人、後継者がいないかまたはいたにしても、勤めに出て稼いだほうがよいという人、あるいは、トマトがよくできないのに賃用ばかりかかって続けられない人、あるいは負債を抱えてにっちもさっちもいかずにギブアップせざるを得なくなった人などから、アグリテックが借り受けているのだそうだ。

そういう人たちのためになんとかして支援してあげたいという中村さんの親子の温情で、いうならば人助け事業である。したがって、ハウスは町内のあちらこちらに点在していて、30カ所ぐらいにのぼるという。

「そんなわけで、ハウスは見映えもよくないし、土地もわるいところですが、まあ、トマトはよくできていると思います」。

葉が若く、光沢もよい

花が大きく色も鮮やか

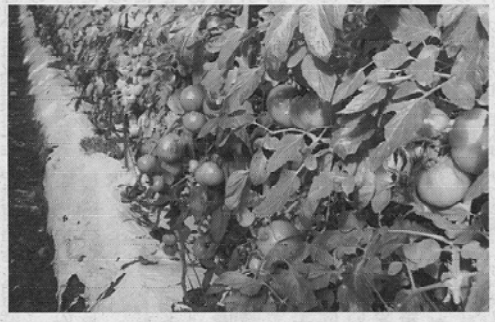
ハウスへ入っておどろいたことは葉が若々しくて、厚味があり、全体が萌黄色をしていることだった。6段ぐらいまで進んでいるが、みずみずしい木ぶりをしている。花も大きくて色が鮮やかだ。

「どの段もトマトがよくなっているでしょう。どうしてもトマトは長期になりますので、なんとかこういう状態を後半までもっていきたいと思っているんですが、鮮緑を使うようになったら、それが実現できそうなんです」

「鮮緑」を使うようになったのは去年から。「丸徳さんの営業の人がこの商品は絶対自信がありますので使ってみてくれといって持ってきました。疑心暗鬼で使ってみたんですが2回ほどかけたら見違えるような木になったので、これは効果があるんだということになったんです。なにより、当社の社長がすっかり惚れ込んで、会員たちにも奨めようということになったんです」と「鮮緑」を使った経緯を聞かせてくれる。

今年は初期から使っている。だいたい葉面散布が主体で、消毒の都度700～800倍に希釈したものを混合散布している。ときには単剤をかけることもあるが、そのときは500倍くらいだ。動力噴霧機を使ってかける。2～3回かけたら木が見違えるほど元気になり葉が立ってくる。「葉先がいつもの年だと枯れてきて、いろんな病気のもとになっていたんですけれども、それがほとんど見られないんです。これは品種のせいかもしれませんけれども、そればかりではなさそうです」と中村専務は語る。

見たところ、着果も申し分なく、玉伸びもよさそうだ。「それと、鮮緑をかけているとトマトの味がよくなることで、社長は美味しいものを作れとわれわれを叱咤激励しているんですが、最近は食味が向上していることを一番高く評価しているようです。契約栽培をしているだけにそのことを最も重視しているんです」



着果、玉伸びもすこぶるよい

量よりも質重視

すべて手選別で選果

収穫は10㌃10～12㌧を目標にしている。量は多くは望まないようにしていて、質で勝負したい考えのようだ。㈱八代トマト流通センターでは納入先に応じて袋詰めをしているが、全量手作業で、機械選果はしていない。

ざっと100人くらいの選果要員がいて、いま現在は日量10～15㌧だがピークの5月になれば日量15㌧～20㌧に増えるという。

「鮮緑」は農薬を使うときはほとんど毎回入れている。ハウスは30カ所にも点在しているから、1日4～5カ所ぐらい防除してもだいたい1週間かかる。だから葉かびとか灰色かびが出ては困るので、それで耐病性品種を導入したわけだ。

いまのところ、そういった病気はほとんど出ていない。それに収穫の回転がいいのは「鮮緑」のせいもあるようだといっている。

計算できる経営を

安定した価格で販売

中村専務は当年39歳、いま油の乗ったところでこれからの活躍に期待されるが、夢はどんなことか聞いてみた。

「日々仕事に追われているもんですから、考えている余裕がないんです。なにしろこれだけの従業員をかかえているので、この人たちの生活を保障しなくてはいけませんから休みはほとんどなく、家族にも負担をかけているんです。いまの人たちの表情はなんとなく暗いですよ。経営的にうまくいって、少しでも利益を出してお金を残さなければ家族に喜んでもらえない。

農家であれば家族で仕事をやっています。家族が仕事をしていながら給料を取れない状態ですから、表情が暗いのも当然かもしれません。だから、これからは計算のできる農業経営にしなくてはいけない。そういう経営だとやりがいが出てくると思います。

たとえば、トマトはいま以上の量をとって、もっとよい作柄を作れば計算通り利益が上がっていきますから、そういう目標が樹てられると思うんです。今年は良かった、悪かったでは長くは続かないでしょう。

量は絶対出さなければいけません。量が出たときに、いかに安定した価格で出すかを考えなければいけないと思います」

（熊本県八代市古閑浜町）

〈八代トマト流通センターについては機会を改めて紹介します〉

㊤葉がいっせいに立っており、葉先きの枯れも全くない。㊦花は大きく、色も鮮やか。これらは「鮮緑」を使っているせいだろうと中村専務は語っている。